



北海道におけるホオアカの繁殖期の分布

藤巻裕蔵

〒072-0005 美幌市東4条北2丁目6-1

摘要

1976～2025年の4月下旬～7月下旬に北海道の1,062区画（4.5 km × 5.0 km）内の1,200か所でのラインセンサスとそれ以外の184区画での定点調査、文献などの記録に基づき、ホオアカ *Emberiza fucata* の分布を明らかにした。ホオアカは北海道ではおもに平野、盆地、大きな川沿いの低地に分布し、おもに標高300 m以下に生息している。おもな生息環境は草地、畑・水田、畑・水田・林で、その他に少数の住宅地にも生息する。

はじめに

ホオアカ *Emberiza fucata* は北海道には4月中旬から下旬にかけて渡来する夏鳥で、農耕地や灌木草原といった開けた環境に生息する種である（藤巻 2024a, 日本鳥学会 2024）。ホオアカの繁殖期における地理分布については、すでに環境庁（1979）、環境省自然環境局生物多様性センター（2004）、鳥類繁殖分布調査会（2021）に日本における分布図が示されている。しかし分布図が5万分の1の地形図（日本測地系に基づく地形図）の大きさの区画（約18 km × 20 km）を表示単位として示されているため、一部の平野部を除き、山岳部も含め北海道全域に分布しているように見える。生態分布や垂直分布についても、概要が述べられているが（清棲 1978）、おもにどのような環境、標高帯に生息するのかは詳しくは明らかにされていない。

分布は形態や繁殖生態などと同じくその種の基本的な特性の一つで、その種について総合的な知見を得るのに重要な基礎資料である。また、鳥類相や鳥類群集の地域差についての検討（藤巻 2018, 玉田 2023, 2024, 2025）では、個々

の種の分布に関する知見は基礎的なデータとしても重要である。

この報告では、筆者が北海道で1976年以来行ってきた鳥類の生息状況調査の結果に基づいてホオアカの繁殖期における環境別・標高帯別の分布について述べるとともに、既存の論文や各種報告書などの調査・観察記録を追加し、地理分布について述べる。分布図では、5万分の1の地形図を縦横とも4等分した区画（約4.5 km × 5 km, 以後「5 km 区画」とする）を単位として表示することで詳細な分布が分かるようにし、環境別の分布や標高帯別の分布についても数量的に示し、北海道におけるホオアカの繁殖期の分布の特徴について述べる。

なお、この報告は北海道における鳥類の繁殖期の分布に関する研究（藤巻 2022a）の一環である。

調査地および方法

調査地は一部の離島（奥尻島、焼尻島、利尻島）を含む北海道全域であるが、おもに調査したのは中央部と南東部（北緯44度0分以南、東経

2026年1月28日受理

キーワード：ホオアカ, *Emberiza fucata*, 分布, 繁殖期, 北海道

141 度 15 分～145 度の範囲)である。また、標高では 2 m から 1,900 m までの範囲である。

5km 区画 1,062 か所で調査した。各区画内に 2km の調査路を 1 か所、一部の区画では 2～3 か所(異なる環境にそれぞれ 1 か所ずつ)を設けた。調査路総数は 1,200 か所である。調査時期は 1976～2025 年の 4 月下旬～7 月下旬で、この間に 1 調査路につき 1～2 回調査した。調査では 6 倍または 8 倍の双眼鏡を用いた。調査時間帯は夜明けから 8 時ごろまでで、調査路を約 2km/時で歩きながら観察帯の幅を定めずに姿の視認またはなき声により確認できたホオアカを記録した。

調査路の環境を調査路沿いの環境にしたがって森林(ハイマツ林帯を含み、調査路の標高は 5～1,900 m)、草地(標高 2～260 m)、畑・水田・林(標高 4～530 m、調査路沿いの環境の 20%以上が林)、畑・水田(標高 2～660 m)、住宅地(標高 2～550 m)に 5 区分した。草地はおもに河川堤防の法面や河川敷の草地、湖沼周辺の草地で、この他に牧草地とムギ畑がある。また住宅地では調査路沿いに公園などの緑地、林、草地がある場合がある。垂直分布では標高帯を 100 m 以下、101～200 m、201～300 m、301～400 m、401 m 以上に 5 区分した。なお、調査路に高低差がある場合には最低点と最高点の中間の値をその調査路の標高とした。

上記の 1,200 か所の調査路で得られた結果を用い、調査路総数に対するホオアカが観察された調査路数の割合を百分率で示した値を「出現率」とし、生息環境と標高別分布を量的に示すデータとした。

分布図の空白部分をできるだけ少なくするため、上述の 1,062 区画以外の 184 区画で上記の調査と同じ期間にラインセンサスより短時間で実施できる定点調査を行った。この調査では、

区画内の任意の場所で日中の 20～30 分間に観察された種を記録した。さらに以下の論文や各種報告書の調査結果を用いた:阿部(1975)、阿部ほか(1970)、阿部・松木(1968)、旭川市(1991)、芳賀・小林(1989)、花輪・黒沢(1985)、橋本(1980, 1982, 1986, 1987, 1988, 1993, 1996, 2007)、林田・橋本(1972)、日野・中野(1992)、北海道(1992, 1994)、北海道環境科学研究センター(1993, 1994, 1996)、北海道野鳥愛護会(2001)、池田(2005)、石城・松岡(1972)、磯(1987, 1988, 2005, 2007, 2008)、川辺(1985, 2002, 2003, 2005, 2010)、川辺・阿部(1982)、川辺ほか(1983)、木下(1999)、今野・藤巻(2001)、小杉(1989)、黒田ほか(1971)、正富(1976)、正富・富士元(1987)、松本ほか(1986)、松岡(1973)、道川ほか(1999)、緑資源公団北海道支社(2002)、三浦(1988, 1989)、宮本(2017)、森(2010)、中川(1981, 1982, 1985)、中川・藤巻(1985)、中川ほか(2017)、日本鉄道建設公団(2002)、二村(1987, 2004)、大館(2004)、大迫(1988)、留萌開発建設部(2006)、貞国(2019)、貞国ほか(2024)、佐藤・石川(1981)、島田(1996, 2016)、根室市教育委員会(2005)、嶋崎(2006)、嶋崎ほか(2014)、鈴木ほか(1990, 1991)、鈴木(1986)、鈴木ほか(1983, 1989)、Tamada(2010)、玉田(2020, 2023, 2024, 2025)、玉田・梅木(2007)、富川(2019)、富川ほか(1995)、筒渕(1998)、渡辺(2019)、矢萩(2024)、由井(1970)。この他に日本野鳥の会各支部報(道南松山 2013～、札幌 2018～、道北 2009～)、室蘭支部とオホーツク支部のホームページ(オンライン^{*1, *2})の記録、未発表の個人の観察記録も用いた。これらの調査結果、文献、探鳥会記録、個人の観察記録に基づき、1,876

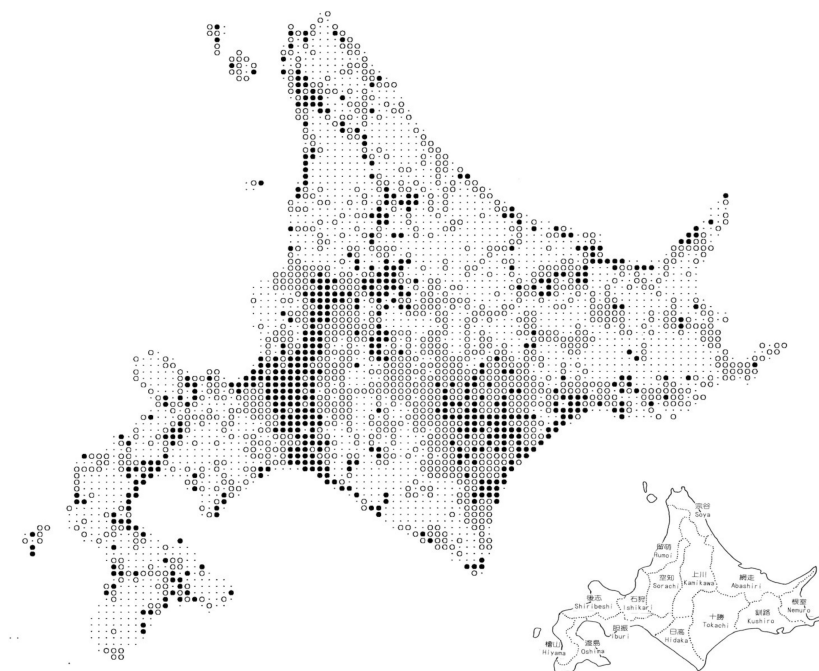


図1. 北海道におけるホオアカの繁殖期の分布 (1976～2025). 円は 5km 区画 (約 4.5 × 5km) を示す.
● = 観察された区画, ○ = 観察されなかった区画, • = 未調査区画.

Fig. 1. Distribution of *Emberiza fucata* during the breeding season in Hokkaido (1976–2025). Circles represent 5km-quadrates (approximately 4.5 x 5.0 km in size). ● = quadrats with birds detected; ○ = quadrats with no birds detected; • = quadrats not surveyed.

区画からホオアカの「記録あり」または「記録なし」のデータが得られた。分布図の作成では、これら 1,062 区画でのラインセンサスと 184 区画での定点調査のデータに加え、上述の 1,876 区画のデータも使用した。

ホオアカの環境と標高帯の区分数は 3 以上なので、各環境間・各間の出現率の差の検定では多重比較(Holm 法)により有意水準を調整した。統計ソフトには R (Ver.4.5.1) を用いた。

結果

地理分布

ホオアカが記録されたのは、1,876 区画のう

ち 578 区画, 30.8% であった。記録のある区画が比較的まとまって見られたのは、函館平野 (渡島地方南部), 内浦湾西部沿岸 (渡島地方北部) から日本海側の小樽 (後志地方東部) にかけての低地, 勇払平野 (胆振地方中部), 石狩平野 (石狩地方・空知地方), 十勝平野 (十勝地方中・南部), 釧路平野 (釧路地方南部), 富良野盆地 (上川地方南部), 上川盆地 (上川地方中部), 北見盆地から網走・小清水にいたる低地 (網走地方中・東部), 名寄盆地 (上川地方北部) から天塩川沿いに河口までの低地, 羽幌・初山別の日本海沿岸部 (留萌地方北部), サロベツ原野 (稚内地方西部) である (図 1)。

表 1. 北海道における環境・標高別のホオアカ *Emberiza fucata* の出現率(1976～2025). 括弧内は調査路数. 出現率については本文参照.

Table 1. Occurrence rates (%)* of *Emberiza fucata* and the number of transects surveyed in different habitats and altitude ranges in Hokkaido during 1976–2025.

環境 Habitat	標高 Altitude (m)					Total
	～ 100	～ 200	～ 300	～ 400	401 ～	
森林 Forest	0 (97)	0 (108)	0 (85)	0 (64)	0 (137)	0 (491)
草地 Grassland	67.6 (108)	72.0 (25)	100 (1)	—	—	68.7 (134)
畑・水田 Agricultural land	67.6 (142)	37.1 (62)	25.8 (31)	0 (13)	0 (2)	50.8 (250)
畑・水田・林 Agricultural land with woods	31.6 (136)	20.4 (54)	23.7 (38)	16.7 (18)	0 (10)	25.8 (256)
住宅地 Residential area	6.9 (58)	0 (8)	0 (1)	—	0 (2)	5.8 (69)

*: (No. of transects of occurrence/No. of transects surveyed)x100. Figures in parenthesis indicate number of transects surveyed.

このほか、日本海、太平洋、オホーツク海の沿岸部の所々にホオアカが記録された区画がある。このように、ホオアカはおもに平野、盆地、大きな河川沿いに分布していた。ただし、根室地方南部は平野であるが、ホオアカが記録された区画はほとんどなかった。

環境別・標高帯別分布

ホオアカの出現率が最も高かったのは、草地で 68.7 % (92/134) で、次いで畑・水田で 50.8 % (127/250)、畑・水田・林で 25.8 % (66/256)、住宅地で 5.8 % (4/69) であったが、森林では観察されなかった(表 1)。森林を除く四つの環境間での出現率の違いは有意であった ($\chi^2=112.34$, $df=3$, $P < 0.01$)。また、それぞれの環境 2 組間での違いも有意であった(それぞれの環境 2 組の全てで $P < 0.01$)。なお、住宅地でホオアカが観察されたのは、郊外の住宅地で、周辺に畑または草本が繁茂する空き地がある場合であった。

標高帯別の出現率については、森林では観

察されず、これがホオアカの生息環境とは考えられないので、それ以外の四つの環境のデータだけを用いた。出現率は、標高 100 m 以下で 48.7 % (216/444)、標高 101～200 m で 34.9 % (52/149)、標高 201～300 m で 25.4 % (18/71)、標高 301～400 m で 9.7 % (3/31) で、標高 401 m 以上では観察されなかった (0/14)。ホオアカが観察されなかった標高 401 m 以上を除く標高帯間での出現率の違いは有意であった ($\chi^2=32.556$, $df=3$, $P < 0.01$)。それぞれの標高帯 2 組間では、100 m 以下とその他の標高帯間、101～200 m と 301～400 m の組み合わせでの違いは有意であったが (100 m 以下と 101～200 m, 201～300 m と 301～400 m で $0.01 < P < 0.05$, 100 m 以下と 201～300 m, 100 m 以下と 301～400 m で $P < 0.01$)、101～200 m と 201～300 m, 201～300 m と 301～400 m との間の違いは有意でなかった ($P > 0.05$)。この結果から、ホオアカは有意に標高 100 m 以下に分布するといえる。このことは、地理分

布でおもに平野，盆地，川沿いの低地に分布していることに対応している。

各環境で観察された最高標高は，草原で 260 m，畑・水田で 260 m，畑・水田・林で 400 m，住宅地で 60 m であった。

考察

北海道でホオアカはおもに平野と盆地の草地，水田・畑，水田・畑・林に生息しており，住宅地でもわずかではあるが観察された。各生息環境の中でもホオアカが記録された調査路は草地で多かったが，水田・畑や水田・畑・林でもそれに次いで比較的多く。これら二つはこの種の代替の生息環境になりうるといえよう。清棲 (1978) は，ホオアカの生息環境について「夏季北海道では平地のいたる所の農耕地，牧場，草原，灌木の散在する草原などに多く，海浜の草原にも多数生息する」と述べている。本州では新潟県の新潟平野でホオアカのおもな生息環境は，川の堤防や河川敷の高茎草本や低茎草本の草地，農耕地である (渡辺・千葉 1979)。生息環境については，今回の結果はこれまでの知見と大きく異なることはないが，今回の報告では，各生息環境におけるホオアカの生息状況について量的に示すことができた。

ホオアカの微細な環境利用について石狩平野の新篠津で調べた結果によると (Tamada 2022)，ホオアカは繁殖期を通して「雑草地」に生息していたが，「麦畑」と「麦畑以外の畑」では繁殖期の後半だけに生息し，「水田」には生息していなかった。今回水田・畑と水田・畑・林での調査では，調査地全体におけるホオアカの在・不在だけを記録し，個々の個体の観察地点の環境を記録していないが，前述の新篠津における結果を考慮すると，水田・畑と水田・畑・林でホオアカの出現率が草地におけるより低かったのは，この種が生息できる環境が少なかつ

たということが考えられる。

北海道で繁殖するホオジロ科鳥類のうち，草原性の種にはホオアカのほかにシマアオジ *Emberiza aureola* とオオジュリン *E. schoeniclus* がいる。シマアオジは草地以外にも農耕地に生息し，住宅地でも郊外で周辺に草地や農耕地があると生息している場合があった (藤巻 2022b)，このような生息状況はホオアカと似ている。しかし，オオジュリンはおもに草地に生息しており，農耕地には生息していても非常に少なく，住宅地ではまったく観察されず (藤巻 2024b)，このような生息状況はホオアカとは異なっている。同じ草原性でも，オオジュリンのように住宅地周辺の草地や農耕地には生息しないというように，種によって微細な環境利用に違いがあるといえよう。

ホオアカは，根室地方南部ではほとんど観察されなかった。根室地方の鳥類リスト (高田 2001，根室市教育委員会 2005) では「根室半島部では極めて稀」とされており，また根室地方南部の春国岱における調査でも，草原でホオアカは記録されなかった (花輪・黒沢 1985，川崎ほか 1997，根室市教育委員会 2005)。環境省が 1978 年，2002 年に行った全国一斉調査でも，根室地方南部におけるホオアカの記録はない (環境庁 1979，環境省自然環境局生物多様性センター 2004)。これまでに得ることができた根室市におけるホオアカの観察記録は，花咲における記録 (阿部・松木 1968) が唯一のものである。ホオジロ *E. cioides* では釧路地方南部，根室地方南部，宗谷地方北部で記録された区画が少なく，その一因として暖かさの指標である温量指数 (吉良 1948) が低いことが考えられた (藤巻 2025)。ホオジロの場合と比べると，根室地方南部と宗谷地方北部の温量指数は，44.6 ～ 52.8 と 46.3 ～ 54.4 でほぼ同じであるが，ホオアカでは記録のある区画が宗

谷地方北部でもかなりあるので(図1), 温量指数だけでは根室地方南部におけるホオアカの不在を説明できないであろう。根室地方の東に隣接する国後島でホオアカは少ないとされていること(Nechaev 1969)も考慮すると, 根室地方南部以東ではホオアカがほとんど生息せず, 根室地方南部がこの種の分布東限になっているようである。なお, 網走地方西部にもホオアカの記録のない区画が多いが, これには以下の二つの理由が考えられる。第一は, 分布図作成に使用した記録以外にこの地方の一地域の鳥類リストにホオアカの記録があったものの, どの区画の記録かが不明で分布図データとして使えなかったためもある。例えば, 大館(2012)の「コムケ野鳥ノート」にはホオアカの記録があるが, 観察対象地がヤソシ沼, コムケ湖, ポン沼, シブノツナイ湖を含む7区画にわたっており, ホオアカがどの区画で記録されたのかが不明で, 分布作成のためのデータとして使えなかった。第二は, ホオアカの生息数が少ない可能性があることである。すなわち, 前述の「コムケ野鳥ノート」によると, 1985~2011年の26年間の観察期間中で同じホオジロ科鳥類のホオジロでは23年間, アオジ *Emberiza personata* とオオジュリンでは全期間の記録があるが, ホオアカの記録は8年間である。

垂直分布ではホオアカはおもに標高300 m以下に分布しており, 標高401 m以上では観察されなかった。これは, おもな生息環境である草地や農耕地がほとんど標高300 m以下にあるためであろう。草原性鳥類の中では, ヒバリ *Alauda alvensis* やノビタキ *Saxicola stejnegeri* のように北海道の高山帯の開けた環境に生息する種がいるが(大館2017, 藤巻2023, 白木ほか2022), ホオアカでは高山帯における観察記録は見当たらない。既存の文献には, 北海道におけるこの種の垂直分布について述べたも

のはなく, 今回の報告では具体的な標高帯を明らかにできた。

本州中央部で, ホオアカは高地, 例えば標高610~1,370 m (Austin & Kuroda 1953), 500~1,500 m (清棲1978)に生息する。しかし, 本州北部では「平地近く」(清棲1978), 新潟平野では低地に生息しており(渡辺・千葉1979), 緯度が高くなるのに従って分布する標高が低くなるといえよう。

ホオアカ以外にも, ゴジュウカラ *Sitta europaea* やノビタキなどのように本州中央部では繁殖期に高地に生息する種(清棲1978)が北海道では低地に生息し, 同時に本州中央部で低地に生息するヒバリやムクドリ *Spodiopsar cineraceus* など北海道では低地に生息する。このようなことは, 北海道の鳥類相の特徴の一つとなっている。

今回の報告では, 北海道における繁殖期の地理分布についてはより詳しく示し, 生息環境や垂直分布については数量的に示すことができた。また, 生息環境については, ホオアカと北海道の他の草原性鳥類と比較し, この種が湖沼周辺の自然草原や河川敷の草地のほか, 農耕地や僅かではあるが郊外の住宅地周辺の草地にも生息し, 生息環境の点でとくにオオジュリンとの違いを明らかにした。

謝辞

観察記録を提供していただいた飯嶋良朗, 大館和広, 黒沢信道, 竹中建, 松尾芳武, 村上順一, 佐々木清彦の各氏と日本野鳥の会旭川支部, 浦河探鳥クラブ, 温量指数のデータを提供していただいた北海道環境科学センター(現在は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所に改組), データの多重比較を行っていただいた(株)ドーコンの山田芳樹氏, 文献収集で協力していただいた渡辺央氏にお礼申し上げる。

引用文献

- 阿部永. 1975. パイロットフォレスト造成に伴う環境の変遷. VI鳥類. パイロットフォレスト造成に伴う環境の変遷(帯広営林局 編). pp.117-133. 帯広営林局, 帯広.
- 阿部永・小林恒明・石城謙吉・太田嘉四夫. 1970. 北大中川地方演習林鳥類調査報告その1. 北海道大学農学部演習林研究報告 27: 69-77.
- 阿部 学・松木勝彦. 1968. 根室市花咲港付近の鳥類. 鳥 18: 227-246.
- 旭川市. 1991. 自然保護調査報告書総集編, 旭川の動・植物一目録・解説. 旭川市, 旭川.
- Austin, Jr. O. L. & Kuroda, N. 1953. The birds of Japan. Their status and distribution. Bulletin of Museum of Comparative Zoology, Harvard College 109:279-613.
- 鳥類繁殖分布調査会. 2021. 全国鳥類繁殖分布調査報告. 日本の鳥の分布を描こう2016-2021年. 鳥類繁殖分布調査会, 東京.
- 藤巻裕蔵. 2018. 礼文島の鳥類相の特徴. 利尻研究 37: 53-56.
- 藤巻裕蔵. 2022a. 北海道における鳥類の繁殖期の分布. 日鳥学誌. 71: 121-135.
- 藤巻裕蔵. 2022b. 北海道におけるシマアオジの繁殖期の分布. 山階鳥類学雑誌 54: 263-271.
- 藤巻裕蔵. 2023. 北海道におけるノビタキの繁殖期の分布. Strix 39: 49-58.
- 藤巻裕蔵. 2024a. 北海道鳥類目録改訂 5 版. 極東鳥類研究会, 美唄.
- 藤巻裕蔵. 2024b. 北海道におけるオオジュリンの繁殖期の分布. Strix 40: 31-39.
- 藤巻裕蔵. 2025. 北海道におけるホオジロの繁殖期の分布. Strix 41: 57-65.
- 芳賀良一・小林茂雄. 1989. 帯広市岩内自然の村の鳥類. 帯広百年記念館紀要 7: 1-6.
- 花輪伸一・黒沢信道. 1985. 春国岱の鳥類. 春国岱野鳥公園基本計画報告書, pp.199-255.
- 橋本正雄. 1980. 根室半島総合調査中間報告一道東海岸線総合調査・長節沼の調査より一. 長節沼調査—鳥類一. 釧路市立郷土博物館々報 (262): 99-101.
- 橋本正雄. 1982. 釧路管内鳥類観察記録(2), -1971-1980-. 釧路市立博物館紀要 9: 9-18.
- 橋本正雄. 1986. 釧路湿原釧路川築堤沿いの鳥類センサスについて. 釧路市立博物館紀要 11: 61-70.
- 橋本正雄. 1987. 北海道東部, 阿寒湖およびその周辺の鳥類センサスについて. 釧路市立博物館紀要 12: 7-22.
- 橋本正雄. 1988. 釧路湿原鳥類センサスについて. 釧路市立博物館紀要 13:9-18.
- 橋本正雄. 1993. IX. 阿寒川水系の鳥獣. 阿寒川水系総合調査報告書, pp.131-150. 釧路市立博物館・前田一歩園財団, 釧路・阿寒.
- 橋本正雄. 1996. 釧路管内鳥類観察記録(4)ー1981ー1990ー. 釧路市立博物館紀要 20: 13-22.
- 橋本正雄. 2007. 釧路支庁管内鳥類観察記録(6)ー1991ー2000ー. 釧路市立博物館紀要 31:11-19.
- 林田恒夫・橋本正雄. 1972. 釧路湿原総合調査中間報告ーシラルトロ沼ー, IV鳥類. 釧路市立郷土博物館々報 (218): 56-58.
- 日野輝明・中野繁. 1992. 北海道北部の落葉広葉樹林における繁殖期の鳥類群集. 北海道大学農学部演習林研究報告 49: 195-200.
- 北海道. 1992. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書, 別寒辺牛湿原・別当賀川下流域. 北海道, 札幌.
- 北海道. 1994. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書, 道東圏域(平野・海岸部). 北海道, 札幌.
- 北海道環境科学研究センター. 1993. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書, 道南圏域・道央圏域. 北海道環境科学研究センター, 札幌.
- 北海道環境科学研究センター. 1994. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書, 道北圏域17地域・道央圏域2地域. 北海道環境科学研究センター, 札幌.
- 北海道環境科学研究センター. 1996. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書, 道東圏域(山岳部)12

- 地域. 北海道環境科学研究センター, 札幌.
- 北海道野鳥愛護会. 2001. 私たちの探鳥会—探鳥会30年の記録—. 北海道野鳥愛護会, 札幌.
- 池田亨嘉. 2005. おもに十勝地方で観察された鳥類1999~2004(2). 帯広百年記念館紀要 23: 9-24.
- 石城謙吉・松岡茂. 1972. 北海道大学苫小牧地方演習林の鳥類相その1. 広葉樹天然林と針葉樹人工林における夏期の種構成と生息密度. 北海道大学農学部演習林報告 29: 43-54.
- 磯清志. 1987. 上川町産鳥類目録. 層雲峡博物館研究報告 7: 9-20.
- 磯清志. 1988. 大雪山黒岳総合調査報告. 黒岳の鳥類. 上川町の自然 13: 1-15.
- 磯清志. 2005. 愛山溪(安足間川流域)の鳥類. 層雲峡ビジターセンター研究報告 25: 1-16.
- 磯清志. 2007. 天塩川上・中流域の鳥類. 層雲峡ビジターセンター研究報告 27: 17-28.
- 磯清志. 2008. 浮島湿原の鳥類相. 上川町の自然 20: 23-32.
- 環境庁. 1979. 第2回自然環境保全基礎調査, 動物分布調査報告書(鳥類). 環境庁, 東京.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2004. 種の多様性調査・鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- 川辺百樹. 1985. 大雪山国立公園, 原始ヶ原湿原の鳥相. ひがし大雪博物館研究報告 7: 43-48.
- 川辺百樹. 2002. 大雪山国立公園沼の平湿原の鳥相. ひがし大雪博物館研究報告 (24): 57-60.
- 川辺百樹. 2003. 大雪山国立公園鳥類目録. ひがし大雪博物館研究報告 (25): 1-49.
- 川辺百樹. 2005. 北海道十勝平野北部, 東居辺の鳥類. ひがし大雪博物館研究報告 (27): 37-49.
- 川辺百樹. 2010. 大雪山国立公園鳥類目録補遺. ひがし大雪博物館研究報告 (32): 237-241.
- 川辺百樹・阿部永. 1982. 十勝川源流部原生自然環境保全地域の鳥類. 十勝川源流部原生自然環境保全地域調査報告書(日本自然保護協会 編), pp.247-261, 日本自然保護協会, 東京.
- 川辺百樹・室瀬秋宏・松田まゆみ. 1983. 大雪山国立公園, 沼の原湿原の鳥相. ひがし大雪博物館研究報告 (6): 29-37.
- 川崎慎二・加藤和明・樋口広芳・高田令子. 1997. 北海道東部・春国岱の繁殖期の鳥類相の変化. Strix 15: 25-38.
- 木下慎. 1999. 美幌町の鳥相. 美幌博物館研究報告 (7): 33-44.
- 吉良龍夫. 1948. 温量指数による垂直的な気候帯のわかちかたについて—日本の高冷地の合理的利用のために—. 寒地農学 2: 143-173.
- 清棲幸保. 1978. 増補改訂版日本鳥類大図鑑I. 講談社, 東京.
- 今野怜・藤巻裕蔵. 2001. 繁殖期における利尻山の鳥類. 帯広畜産大学研究報告 22: 125-133.
- 小杉和樹. 1989. オタダマリ沼の鳥. 利尻町立博物館年報 8: 47-60.
- 黒田長久・白附憲之・千羽晋示・小笠原 嵩・由井正敏. 1971. JIBP主調査地, 大雪山地域の動物相調査報告III. 大雪山の鳥類調査(1970年7月). 陸上生態系における動物群集の調査と自然保護の研究, 昭和45年度研究報告(加藤陸奥雄編), 23-50. JIBP/CT-Sセクション, 仙台.
- 正富宏之. 1976. 大雪山系自然生態系総合調査中間報告(第2報), 第二章鳥類調査. 大雪山系自然生態系総合調査中間報告(第2報), pp.195-222, 北海道, 札幌.
- 正富宏之・富士元寿彦. 1987. 北海道北部サロベツ原野の鳥類相. 専修大学北海道短期大学紀要(自然) 20: 253-280.
- 松本光二・黒田弘章・水間秀文. 1986. 名寄の鳥類とその生息環境. 名寄市郷土資料報告 1: 7-18.
- 松岡茂. 1973. パイロットフォレストの鳥類相—夏期—. 北方林業 25: 329-334.
- 道川富美子・丹羽真一・渡辺 修・道川 弘・渡辺展之. 1999. 北海道北部, 霧立峠周辺の針広混交林の鳥類相と植物相. 士別市博物館報告 17: 47-59.
- 緑資源公団北海道支社. 2002. 平成14年農用地総合整備事業14根室道3工区環境影響評価業務報告書. 緑資源公団北海道支社, 札幌.

- 三浦二郎. 1988. 檜山道立自然公園総合調査IV動物, 第2章鳥類. 道立自然公園総合調査(檜山道立自然公園)報告書, pp.176-202. 北海道自然保護協会, 札幌.
- 三浦二郎. 1989. 狩場茂津多道立自然公園調査IV動物, 第2章鳥類. 道立自然公園総合調査(狩場茂津多道立自然公園調査)報告書, pp.123-146. 北海道自然保護協会, 札幌.
- 宮本誠一郎. 2017. 礼文島の鳥類(2). 利尻研究 (36): 1-12.
- 森信也. 2010. 知床五湖, ルンシャおよび知床岬における鳥類観察記録2003-2009. 知床博物館研究報告 31: 15-24.
- 中川元. 1981. 知床半島の鳥類調査報告. 知床半島自然生態系総合調査報告書(動物編), pp.43-77.
- 中川元. 1982. 知床半島先端部の鳥類. 知床博物館研究報告 4: 49-54.
- 中川元. 1985. 知床半島中央部の鳥類. 知床博物館研究報告 7: 17-20.
- 中川元・藤巻裕蔵. 1985. 遠音別岳原生自然環境保全地域における鳥類. 遠音別岳原生自然環境保全地域調査報告書, pp.79-404. 環境庁自然保護局, 東京.
- 中川優奈・三上かつら・三上修. 2017. 河川が鳥類多様性に与える影響: 函館市亀田川の事例. 日鳥学誌. 66: 133-143.
- Nechaev, V. A. 1969. 南千島の鳥類. ナウカ, レニングラード(原文ロシア語). (藤巻裕蔵訳. 1979. 南千島の鳥類. 日本鳥学会, 東京).
- 根室市教育委員会. 2005. 根室市鳥類生息調査報告書. 根室市教育委員会, 根室.
- 日本鳥学会. 2024. 日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.
- 日本鉄道建設公団. 2002. 北海道新幹線(新青森・札幌間)環境影響評価書. 日本鉄道建設公団, 東京.
- 二村一男. 1987. 北海道演習林の鳥類相. 京都大学農学部演習林集報 17: 1-13.
- 二村一男. 2004. 京都大学北海道研究林白糠区の鳥類相. 標茶町郷土博物館報告 6: 49-63.
- 大館和広. 2004. コムケ湖シマアオジ3年調査. とっ
かり (25): 2-6.
- 大館和広. 2012. コムケ野鳥ノート. 紋別市立博物館, 紋別.
- 大館和広. 2017. 大雪山, 登山で出会った鳥たち. 北海道野鳥だより (190): 4-7.
- 大迫義人. 1988. 北海道東部地方斜里の防潮保安林とその周辺における夏期の鳥類相. Strix 7: 231-238.
- 留萌開発建設部. 2006. 平成17年度天塩川水系(天塩川下流)鳥類調査報告書. 留萌開発建設部, 留萌.
- 貞国利夫. 2019. 釧路湿原鳥類目録—1935年～2019年の記録—. 釧路市博物館紀要 38: 23-80.
- 貞国利夫・加藤ゆき恵・土屋慶丞・野本和宏. 2024. 釧路湿原鳥類目録. まもる, つかう, のこす, 釧路湿原を未来へ—釧路湿原データブック—, pp.55-60. 釧路市博物館, 釧路.
- 佐藤正三・石川信夫. 1981. 大雪山勇駒別及び姿見付近の鳥類調査. 北海道教育大学大雪山自然教育研究施設研究報告 16: 15-27.
- 島田明英. 1996. 美幌町鳥類調査(1996年). 美幌博物館研究報告 (4): 1-18.
- 島田明英. 2016. 標津湿原の鳥類. 天然記念物標津湿原保全対策調査報告書 pp.267-292.
- 嶋崎太郎. 2006. 美幌町内の公園における繁殖期の鳥類相. 美幌博物館研究報告 13:59-66.
- 嶋崎太郎・川崎康弘・町田善康. 2014. 美幌町鳥類目録. 美幌博物館研究報告 21:27-62.
- 白木彩子・黒沢令子・磯清志. 2022. 北海道の山岳地域における繁殖期のヒバリの生息状況. Strix 38: 39-50.
- 鈴木祥悟・由井正敏・伊藤功・高橋和規. 1990. 奥尻島の鳥類—繁殖期の森林性鳥類群集. 北方林業 42:197-201.
- 鈴木祥悟・由井正敏・伊藤功. 1991. 北限地帯ブナ林の繁殖期の鳥類群集. Strix 10: 213-218.
- 鈴木悌司. 1986. 十勝西部のカラマツ人工林における鳥類の繁殖密度. 日本林学会北海道支部論文集 34: 121-123.
- 鈴木悌司・斎藤新一郎・斎藤満. 1983. 岩見沢地

- 方の天然生落葉広葉樹林における繁殖期の鳥類群集. 北海道林業試験場研究報告 21: 95-103.
- 鈴木悌司・宮木雅美・斎藤満, 1989. トドマツ高齢人工林における繁殖期の鳥類相. 日本林学会北海道支部論文集 37: 116-118.
- 高田令子. 2001. 根室支庁管内鳥類リスト. 根室市博物館開設準備室紀要 15: 95-114.
- Tamada, K. 2010. Relationship between census efforts and the number of species encountered in line transect censuses of breeding bird populations in woodland and grassland habitats of eastern Hokkaido. *Ornithol. Sci.* 9: 55-65.
- 玉田克巳. 2020. 北海道北部ベニヤ原生花園における鳥相変化. *Strix* 36: 33-39.
- Tamada, K. 2022. Characteristics of the avifauna in a rice field dominated rural area, and habitat use by grassland birds in Western Hokkaido, Japan. *Ornithol. Sci.* 21: 215-225.
- 玉田克巳. 2023. 北海道渡島半島西部の鳥類1. 落葉広葉樹における繁殖期の鳥類相. *Strix* 39: 59-74.
- 玉田克巳. 2024. 北海道渡島半島西部の鳥類2. 草原環境における繁殖期の鳥類相. *Strix* 40: 61-71.
- 玉田克巳. 2025. 北海道渡島半島西部の鳥類3. ヒノキアスナロ林における繁殖期の鳥類相. *Strix* 41: 47-56.
- 玉田克巳・梅木賢俊. 2007. 札幌市と小樽市の鳥獣保護区に生息する繁殖期の鳥類. 北海道環境科学研究所センター所報 33: 58-65.
- 富川徹. 2019. 夕張岳の鳥類. 夕張岳, 大いなる自然, その魅力を訪ねて, pp.74-98, ユウパニコザクラの会, 江別.
- 富川徹・小畑淳毅・福岡将之. 1995. 礼文島における春季(1994)の鳥類相. *利尻研究* (14): 11-16.
- 筒渕美幸. 1998. 十勝地方の中部と北部における鳥類センサス. 上士幌町ひがし大雪博物館研究報告 20: 79-89.
- 渡辺央・千葉晃. 1979. 新潟県におけるホオアカの繁殖期の分布- I 平野部河川流域. 長岡市立科学博物館研究報告 14: 13-22.
- 渡辺恵. 2019. 網走市こまば木のひろばの鳥類相. 知床博物館研究報告 41: 41-47.
- 矢萩樹. 2024. 初山別村における鳥類の観察記録. *利尻研究* (43): 39-52.
- 由井正敏. 1970. 標茶パイロットフォレストの鳥類相. 北方林業 22: 329-334.

オンラインドキュメント

- *1) 日本野鳥の会室蘭支部. 2021. 日本野鳥の会室蘭支部<<http://wb-muroranshibu.sakura.ne.jp/>>. 2025年8月1日参照
- *2) 日本野鳥の会オホーツク支部. 2021. 日本野鳥の会オホーツク支部. <<http://www.wbsj-okhotsk.org/>>. 2025年8月1日参照

Distribution of the Chestnut-eared Bunting *Emberiza fucata* during the breeding season
in Hokkaido, northern Japan

Yuzo Fujimaki

Higashi 4, Kita 2-6-1, Bibai, Hokkaido, 072-0005, Japan

The Chestnut-eared Bunting *Emberiza fucata* was censused along 1,200 transects (2 km in length) located within 1,062 quadrats (4.5 x 5.0 km) in Hokkaido from late April to late July during the period 1976–2025. Additional data were obtained from spot census records and literature surveys to determine its distribution. The Chestnut-eared Bunting was distributed mainly in plains, basins, and lowlands along major rivers, and was recorded mostly at altitudes of 300 m or less. Its main habitats are grasslands and agricultural land.

Key words: breeding season, distribution, habitat, Hokkaido, Chestnut-eared Bunting, *Emberiza fucata*